

地下経済から太陽の下へ

国民も移民を「必要な存在」とみなしはじめたが

カーラ・パワー

夕暮れになると、ミラノの有名な大聖堂、ドゥオモの南側の広場に移民が集まってくる。ペルーやフィリピンから来たメイド、北アフリカやウクライナから来た建設労働者、ナイジェリアや南アジアから来た路上清掃人。彼らはおしゃべりし、タバコを吸い、広場を行き交う人々を眺める。

7年前にチュニジアから来たロフティ・ベン・ハサン（41）も、そんな1人。ドゥオモでのひとときは、建設現場でのつらい労働と、12人が一緒に寝起きする住環境のひどさを忘れられる時間だ。

妻も葬儀用の花飾りを作って働いているが、公衆浴場でシャワーを浴びられるのは週に1度きり。「イタリアは先進国というけれど、実は第三世界だよ」と、ハサンは言う。「連中は、仕事以外は何も与えちゃくれない」

イタリアが移民を受け入れはじめたのは、比較的最近のこと。今でも移民の割合は総人口の2.9%にすぎず、欧州では最低だ。

しかも、移民を温かく迎えたのは「地下経済」だけだ。地下経済とは、脱税などのために当局に申告されない経済活動。そのため移民は、社会保障も受けられない。

政府がねらう税収アップ

だが、状況は変わり始めている。政府や経済団体は、今後予測される労働不足を補うために、さらに数十万人の移民が必要になると見積もっている。

世論調査によれば、労働力の高齢化を背景に、国民も移民を受け入れはじめたようだ。ミラノ大学の社会学者、エミリオ・レイネリは「移民は侵略者扱いされてきたが、今では『望ましくはなくとも必要な存在』とみなされるようになってきた」と言う。

最近まで当局の移民に対するスタンスは、国外追放もしない代わり面倒もみないというものだった。医

療や法手続きでの援助は、カトリック教会が担ってきた。

不法就労しかできないことは、移民の側も承知していた。1998年まで、外国人は自営業を始めることもできなかった。

イタリア当局は合法的な移民を増やす一方、地下経済で働く移民への締めつけを強化しようとしている。推定50万人の不法就労者が正規の移民として登録されれば、税収は5兆6000億リラ（約3200億円）増える。

公式統計も外国人労働者の需要を30万人とはじき出しているのに、右翼政党の北部同盟は不法滞在者は投獄すべきだと提案している。ロベルト・マローニ労相も最近、仕事をもたない外国人は「国から追い出すべきだ」と語った。

これが、勤勉な移民に対するイタリア流の「歓迎」らしい。

ニューズウィーク日本版

2001年8月15/22日号 P.23

Storming Fortress Europe

それでも欧州に渡りたい

流入阻止をめざして
欧州各国は国境管理を強化
だが命がけで密入国を
企てる移民は減らない

ロッド・ノードランド

イタリア・シチリア島のポルトパーロ・ディカポ・パッセーロ村。酒場「カプリーチェ」は、朝の漁を終えた漁師のたまり場だ。

昨年のある日のこと、漁師の1人が、網にかかった奇妙な「獲物」をカウンター奥の奥に置いていった。それは、海藻にまみれた人間の頭部だった。

「ただのいたずらだったんだ」と、住民の1人は言う。しかし、掃除中に思いもよらないものを見つけたバーテンダーは仰天し、店の前の街灯の上に置き去りにした。

それを目にした向かいの精肉店の店主は、マフィアの警告にちがいないと考えた。以来、村の人々は店主の姿を見ていないという。

だが、これはマフィアではなく、「要塞欧州」の象徴にほかならなかった。

網にかかった頭は、1996年に船の難破で死亡した283人の密航者の1人のものだった。イタリア政府当局はこの事件を知りながら、行方不明となった密航者（スリランカとリベリアの出身者）の捜索に乗り出さなかった。ポルトパーロの漁師たちの手で何体もの遺体が上がりはじめた後でさえ、当局の姿勢は変わらなかった。

対策強化で犠牲者が増加

沈んだ船が発見されたのは今夏、漁師の1人がこの事件を公にしてからのことだった。

街灯の上から「頭」を下ろした地元の司祭は、イタリアのマスコミがポルトパーロの住民を無神経と報

じたのは不当だと言う。「これはグローバルな問題だ」

少なくとも、ヨーロッパ全体の問題であることは確かだ。難民支援団体の推計では97年以降、少なくとも6000人がヨーロッパへの密入国の最中に死亡している。オランダの活動団体は2406人の死者を確認しており、ほとんどが96年以降のケースだ。

イタリアのアドリア海沿岸では、死がほとんど日常茶飯事と化している。

「アドリア海は墓場さながらだ」と言うのは、オトラントの財務警察に勤務するロベルト・グリオト。オトラントは、密航の拠点であるアルバニアのプロレに最も近いイタリア南部の港町だ。「このあたりの海の底には、たくさんの遺体が転がっている」

急増する不法移民の波を受けて、ヨーロッパ諸国は国境管理を強化している。不法移民の大半はアフガニスタン人、クルド人、コソボでの迫害を逃れたロマ、そして職を求めるアフリカ人だ。

イタリアとスペインは、沿岸にレーダー基地を設けて密航船を監視。陸の国境地帯では、トラックや列車に潜む不法移民を捜し出すのに赤外線・熱センサーが使われている。

航空、海運、トラック輸送会社も、結果としてあれ不法移民を運べば重い罰金を科されるため、対策を強化している。ドーバー海峡を結ぶ鉄道のフランス側終着駅カレーでは、鉄条網と強力なアーク灯で周囲を固めている。

スペインやイタリアなどの「最前線」国は、移民労働力を必要としていながらも、経済難民は発見後ただちに本国へ送還する動きを強めている。

「ここには大きな矛盾がある」と、スペインの港町アルヘシラスのモロッコ総領事ムスタファ・エル・ホルは言う。ジブラルタル海峡に面するこの町は、ヨーロッパとアフリカを結ぶ拠点だ。「政治的には国境を閉鎖しなければならないのだが、労働力不足という現実がある。入国できた不法移民はすぐに労働市場に吸い込まれる」

「人命など価値はない」

密入国を抑えようとするヨーロッパ諸国の努力が、逆に犠牲者を増やす結果につながっている。

たとえば、イタリアが密入国斡旋の罪を重くすると、密航請負業者は海岸で逮捕される危険を冒すよりも移民を船から海中に突き落とすようになった。また取り締まりの強化とともに、密航請負業者は値段をつり上げた。

不法移民の上陸に最もよく使われているのは、全長6メートルほどのゴムボートだ。本来は6人乗りだが、業者は60人も詰め込むことさえある。そうすれば1回で10万ドルも稼ぐことができ、船を失うことも問題ではなくなる。しかも「料金」は前払いだ。

「スペイン政府は解決策を見つけなければならない」と、スペイン赤十字のフェルナンド・コルドベスは言う。「国境を開放し、国と移民の双方のニーズを満たすビザを出して、彼らを受け入れよう」

不法移民は、ヨーロッパ全域の国境地帯で死を迎えている。コソボの山中で凍死する者、スロバキアとチェコの国境を流れるモラバ川で溺死する者、ドーバー海峡を渡る保冷トラックの中で窒息死する者。飛行機の車輪部分に潜んで密航を企て、墜落死するケースも相次いでいる。

イタリア財務警察のピエトロ・スパノ警部補は、オトラントで30人が乗った船を追跡し、10人を検挙し

た。残りの20人が逃げ去ったのは、密航業者が小さな子供を抱え上げ、近づけば海に投げ込むと脅したためだった。スパノは、それがただの脅しでないことを知っていた。

「人が海に突き落とされる事件はいつも起きている」と、彼は言う。「人の命など、密航業者にはなんの価値もない。まるでオレンジでも扱っているかのように」

不法移民に多いのは、すでにヨーロッパ内に親族などがいるケースだ。アルヘシラスで死体安置所と葬儀所を兼ねる「タナトリオ・ロス・バリオス」には、予定日時に現れない移民に関する問い合わせの電話がかかってくる。安否を気遣う親族からの電話だ。

経営者のマルティン・サモラ・サンチェスは、海峡で溺死した密航者の遺体をモロッコに運んでいる。最近では、サンチェスの携帯電話の番号を知っている移民もいるという。

「『ボートが沈みかけている、助けてくれないか』という電話をかけてきた人もいる」と、サンチェスは言う。「悲惨な話だ」

合法的移民として扱えば

中国には「生まれ方は1つ、死にざまは千」ということわざがある。「要塞欧州」が防壁を高くすればするほど、不法移民はさまざまな死に目にあうことになる。

「このままではいけない」と、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のルパート・コルビルは言う。「壁を高くしたところで、人々はトンネルを掘ってその下をくぐろうとし、途中で死ぬだけだ」

コルビルによれば欧州諸国も、死にいたる密入国をやめさせるためには、より多くの移民を受け入れる方法を考える必要があることを認識しはじめたという。

どちらにせよ、移民が流れ込んでくることに変わりはない。だが合法的な移民であれば、国の税収に貢献する可能性も高くなる。そして、仕事を得るために命を落とす必要もなくなる。

ニューズウィーク日本版

2001年8月15/22日号 P.24